山のパンセ

串田孫一

山のパンセ

串田孫一

実業之日本社刊

山のパンセ

定価200円

昭和32年4月15日 初版
昭和32年5月16日 三版
©

著者 串田孫一
発行者 増田義彦

発行所 東京都中央区銀座西1の3
株式会社 実業之日本社
電話京橋(56)5121—5
振替口座東京326

印刷 株式会社佐藤印刷所

裴頠 著者

山のパンセ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

山での行爲と思考　一
ふたりの山　八
ひとりの山　一三
雪のマチガ澤　二一
雪の森の一夜　二五
山のソナチネ　三五
仙水峠から栗澤山　四〇
富士山　四六
雪のある谷間　五四
歌と死　五九

霧の彼方　六八
夏草の匂う日　八一
旅人の悦び　八六
高原にひそむ詩　九三
八ケ岳の見える旅　一〇〇
高原の山小屋　一〇七
雪を待つ草原　一一二
山小屋の書棚　一一八
私の山とスキー　一二三
冬山の旅　一三

雪・氷・風　一三五
春の山　一四〇
息子の山登り　一四四
山の地圖　一四七
不安の夜　一五一
エーデルワイス　一五九
スウィスの山　一六三
山の夜風　一六六

山での行爲と思考

今年は二月になつてから續けざまに山へ出かけました。四日五日、ある時は二週間近くも雪の山へ入つていました。どうしてまた急に、そんなに山ばかりへ行くようになつたのかと言つて首を傾ける者もいますけれども、私は別に、自分のことを不思議に思つてはいません。二年ほど前に久し振りに雪の山へ登つた時には、寒さにもこたえましたし、膝も昔のようには動いてくれませんでした。自分でも歳を考えて、まあ止むを得ないことだと思いました。それよりも、もう眺めることも出來ないと思つていた岩峰やかたい氷や、無數の針のかたまりのような風に再びめぐり會えたことを悅びました。

しかし、それから、體力に不安を抱きながらも、懷しい山々を訪れるたびに、脚や呼吸にも、少しずつ自信をとり戻し、時々は負けない氣持や强情を張つてみることも出來るようになりま

した。しかめ面をしながらも心たのしく霧や雨の中を歩き、氷の富士の、非情の烈風にもまけずに、山頂に辿れたことを、實は秘かによろこんでいるのです。

*

ところで。さて私は困つてしまいました。山の中で、私は何を考えているのかと訊ねる人があるのです。それは何故山へ登るのかと質問された時と同様に、あるいはその時以上にすらりとはお答え出來ません。私はつい最近も山から歸つて來たのですが、その山で、また過去に登つた幾つもの山で一體どんなことを考えていたか、正直に言つて覺えてはいません。そうかと言つて、山へ行くと何も考えなくなるという譯でもないので、それで困つてしまいました。

山では自分の行爲の質が變るように、思考の質も變るのでしょう。

*

どうも私は、街を歩いている時の方が、餘計に何かを考えているような氣がします。どつちみち私のことですから、切れ切れのまとまりのないことでしようが、山の中では、それさえも

殆んどしないで、苦しければ苦しいように大きな息をし、それを我慢し、一歩一歩踏み出しているとしか思われません。富士の山頂に近い氷の斜面では、五十歩登つてはピッケルに倚りかかつて一息入れることを繰りかえしていました。

そして歸つて來てから、手帳に鉛筆や萬年筆で亂雜に書いたことを、自分でも、判讀出來なくならないうちに整理をします。普段の日記帳には書かずに、山日記の方へ繪なども入れて書くのがたのしみです。それをしながらいろいろのことを想い出します。樹林帶を夜登つている時に、木々の梢が觸れ合つて、不思議な音を立て、私の足をとめたことだの、雪庇が落ちそうになつていた稜線から、何度も何度も小規模な旋風が起つて、それが百メートルほど雪の急斜面を下つて來ると、そこらあたりに埋れ殘つている岳樺をさわがせては、消えてしまつたこと、啄木鳥の造つた木の幹の穴が大きかつたこと、手先がどうにも冷たくて、いよいよ凍傷にかかるのかと思つたこと、まずそんな種類のことならば、幾らでも細かに想い出すことは出來ます。けれどもその時々に、私は一體何を考えていたか、ちつとも浮んでは來ません。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人間のうちに、靜的な叡智人ホモ・サピエンスと、動的な工作人ホモ・ファベールの區別をした人がいます。ごぞんじでしようか。

私は昔、そのことを教えられた時、山を歩く人間は行動的な人間に屬するらしいことを知つて、すつかり考え込みました。考え込んでも私の頭は單純にしか動いてくれなかつたために、それ以來ホモ・サピエンスの方に何ということもなく憧れるようになりました。

憧れたところで、そのとおりになるわけもありませんけれど、重たい荷物を背負つて山を歩き廻つていては、いよいよ單純になり、いよいよ愚かになるばかりのように思われ、それよりも、部屋に閉じこもつていても考える人になりたいという願いを強く持ちつつ、それが既に賢明な決意だつたように山から離れました。

*

これは今でも根本的には訂正する必要のない考え方だと思つています。天候に注意するとか、雪崩に氣を配るとか、その程度のことは當然ですけれど、多くの場合、ただ頑固に意地を張つて足を動かしていれば、いつかは山頂に立つことが出來ます。そして何と言つてもそれが山登

りの一番大きな要素です。疲れて、そのまま登る意欲を失つてしまえば、そこにどんな理由があろうと、山での行爲は大體終つてしまうことになります。

ただ倒れて動けなくなつてしまうまでに疲れ切ることは非常に愚かなことで、少しも立派ではありませんし、明らかに敗北です。

ところが、山での行爲と思考とが一つになる場合があります。私は、秘かにそういう機會に巡りあうことを願つて山へ出かけているような氣さえして來ました。つまりそれは、さまざまな困難にぶつかつた時です。そしてあつさりと引きさがらずに、その困難を乘り切ろうとする時です。引きかえさなければならない時も勿論あります。それを考えずに進むことは、もう勇氣でも何でもない、ただの無謀にすぎず、正しい判斷の結果として引きかえすことを決意することもよくあります。

しかし、自分の前に、兩手をひろげて立ちふさがるような困難が、それを充分に檢討したあげく、充分に乘り切れる自信がこちらに湧いて來た時、どれほど胸をさわがせ、高鳴らせるものか、想像していただくことが出來るでしょうか。

私はもう若くはありません。嘗て持つていた筈の力をいつの間にか失つてしまいました。そ

のために、段々と下らない用心深さを否應なしに持つようになつてしまいました。そしてもつと歯痒いことは、しばしば、山の中にいながら樂をしようと思うことです。そういうよくない根性を拂いのけるために、また餘計な力を使わなければならなくなつたのが實に情けないのです。

けれども、雪の中で、豫定しなかつた露營をした時、山頂に近づくにつれていよいよその堅さを增す氷や、ぐらつく岩の上に自分の身を置いた時に、私の行爲と思考とは一つのものになりながら極度に緊張します。

それは恐怖とは大分異つた種類のもので、怖いと思い出したらば一歩も足が出なくなるようなところでも、何とかして自分を高く高く持ちあげて行こうとするための思慮分別を是非とも必要とする行爲です。

僅かの誤間化しも許されない、しかも實に大きな自然という舞臺に、私は、いやいや追い込まれるのではなくて、自分から出かけて行くこと、これが私の望む試煉だと言つては大袈裟すぎるでしようか。

直ちに行爲を伴わなければ意味を持たないような思考は、思えば山で、一つの困難にさしか

かつた時に、私が自分にまじめに要求するもので、そこで若しも妥協や、いい加減な態度を自分に許したならば、困難を前にして退くか、さもなければ自分をもつと大きな、時には死の危險におとし入れることになるでしょう。

*

私は山で何を考えたか。

確かに私は考えました。行爲と思考とが一緒になつたところに、自から生れるその緊張は、日ごとの、平凡なように思われる生活の中でも、仕事に向つている氣構えの中でも、當然必要なことであつて、そのために私は自分の力と技倆との限度をためしてみているのだと考えました。私は自分を故意にいじめようとは思いません。けれども故意に、殊更に自分を愛すること、それも眞の愛を以てではなしに、自分の氣儘をただとおさせることには絶えず戒めを與えて行きたいと思います。何かにつけて迷うことがあまり多い私は、次々にどちらかを選ばずには一歩も進めないようなところへ自分を立ち向わせる必要を感じ、それで山へ出かけているというわけなのです。

ふたりの山

それは確か四月の末頃のことだつたと思うが、ずつと古いことである。私たち二人は、何も氣のおけない間だつたので、何度かそれまでも一緒に山へ登つていた。しかし、これは、山へ幾度か行つている人なら誰もが氣附いていることだと思うが、何人かの山の仲間がいるとして、この友だちとならこういう山へ、また別の仲間とならちがつた種類の山へ行くということが、何ということもなく自然に決まつて來る。それは、街の生活をしていても同じことで、Aと一緒の時は、どこかの喫茶店で長いお喋りをし、Bと出會つた時には大概映畫を見ることになり、またCと一緒なら、ただ無闇とあてもなく歩くという風なことが必ずあると思う。

私も、今よりは遙かに多く山へ出かけていた時分、何の緊張もなく、山頂を目ざすのでもなく、ただ高原を一緒に歩いているのにふさわしい友だち、それから、持つて行く道具も心構え

も全くちがつて、岩や氷の、危險も多いところへ行く時の友だちが、別々にあつた。

それは、私自身が、ただ山へ來ていればそれだけでいいといういつも曖昧な態度だつたからかも知れないが、その、いわば組合せが狂うと、たとえ計畫どおりに歩くことが出來ても、何か氣がねが多く、さつぱりとした樂しい氣分になり切れないものである。

*

その時は、今でも變によく覺えているのであるが、その山行きの計畫を立てている時から妙な不安があつた。決して二人の力を越えたことを考えた譯ではない。私たちは、自分の能力の限度を知つていたから、體力の點でも、技術の點でも、その限度のぎりぎりのところまでを使おうとはせず、いつも計畫を立てる時には必ずゆとりを作つておくことは心得ていた。

そういう風にして私たちは前の晩、二人切りで泊つた小屋を朝早く立ち、豫定どおり、正午までに、一つの岩を登り切つた。岩の亀裂に殘つた雪が、その日の強い太陽に思い切りとけて、可なり登りにくく、岩を登り出してから二度ほどルートを考えなおさなければならなかつた。ハーケンを打つて、お互いに充分の注意をし合い、そのために可なり神經をつかつて岩の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com